付編１　朱雀大路関係発掘調査（抄）

1. 羅城門周辺の発掘調査　平城京羅城門跡発掘調査報告（大和郡山市1972）

平城京羅城門跡は、大和郡山市の佐保川にかかる来生橋の北側にある。近世郡山城築城の際、佐保川の河道を朱雀大路路面位置につけかえたために、門の遺構の大部分は佐保川の西側堤防下にある。

本調査は羅城門の遺構および周辺の条坊遺構を把握することを目的とし、1969年に第１次調査（奈良市教育委員会主催）、1970年に第２次調査（大和郡山市教育委員会主催）、1972年に第３次調査（大和郡山市教育委員会主催）を行なった。

調査の経過　第１次調査では、九条大路と羅城の検出を期して佐保川提防東側の水田地帯に４本の南北トレンチを設定。しかし調査地一帯は佐保川のかっての氾濫による削平を受け、奈良時代の明確な遺構は検出できなかった。

第２次調査では、比較的流れの影響の少ないとみられる佐保川提防西側を調査した。朱雀・九条両大路にかかるように鉤手状のⅡ－Ａトレンチ、羅城門の南端の状況をさぐるためⅡ－Ｂ・Ｃトレンチ、羅城を含めた京の南端の状況をさぐるためⅡ－Ｄトレンチを設定した。その結果、朱雀大路西側溝・九条大路北側溝・京の南端の濠などの遺構の残存状況が予想以上によいことが判明した。

そこで第３次調査では、１・２次調査で羅城門遺構の存在が予想できた位置にⅢトレンチを設け、羅城門基壇をはじめ朱雀大路西側溝南延長部・暗渠などを検出し、所期の目的を達した。

朱雀大路西側築地と九条大路北側築地　地築地本体は削平され、掘込地業部のみを検出した。掘込地業は幅4.2～4.3m、深さ20～35cm。埋土は一様で版築の痕跡はない。朱雀大路西側築地は、地業内で柱掘形を検出した。１本柱の築地であろう。この築地の下層で瓦の堆積層と垂木を検出し、最低２回の造作をしたことがわかるが、下層の築地本体の痕跡は不明。両築地の内側一帯で、転落したままの状態で築地の屋根瓦を検出した。

朱雀大路西側溝と九条大路北側溝　朱雀大路西側溝は断面逆台形で、幅４ｍ、深さ90cm。東岸にしがらみが残存。埋土は５層あり、最下層から和銅開珎・木簡片・土器片・瓦片が出土し、最上層から主として瓦が出土した。九条大路北側溝は断面逆台形で、幅３ｍ、深さ70cm。埋土は３層あり、いずれも瓦片を含み、最下層から和銅開珎が出土。両大路の各側溝は、朱雀大路では築地掘込地業の東端から４ｍ東、九条大路では築地掘込地業の南端から３ｍ南にある。築地と側溝の間は平担地で壕地にあたる。九条大路北側壕地の部分に、

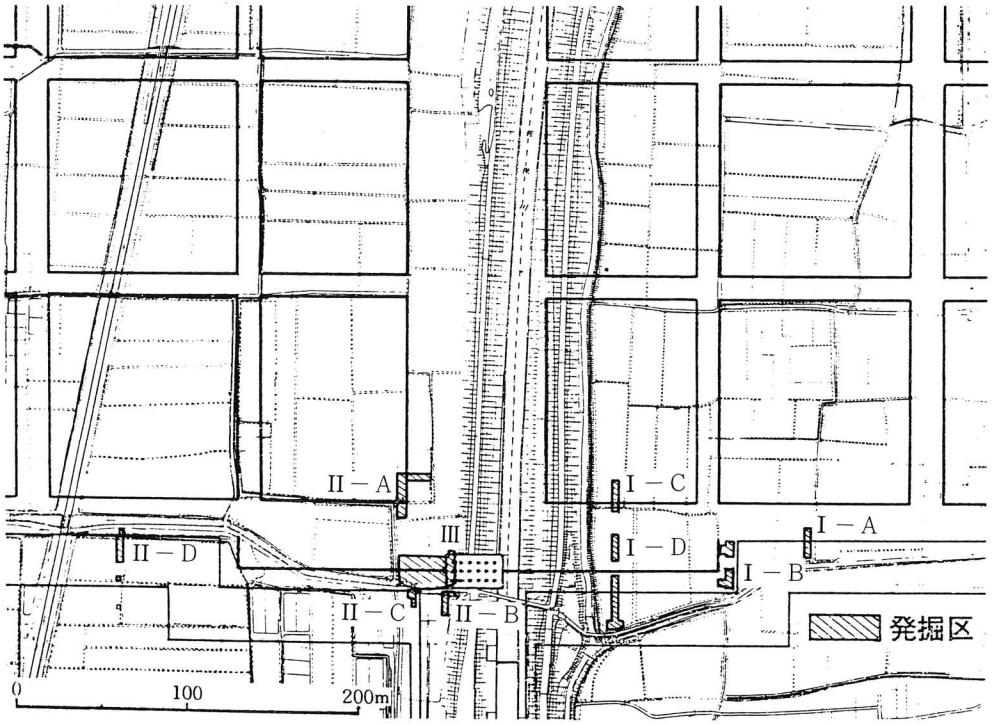

fig.19　羅城門周辺発掘区配置図

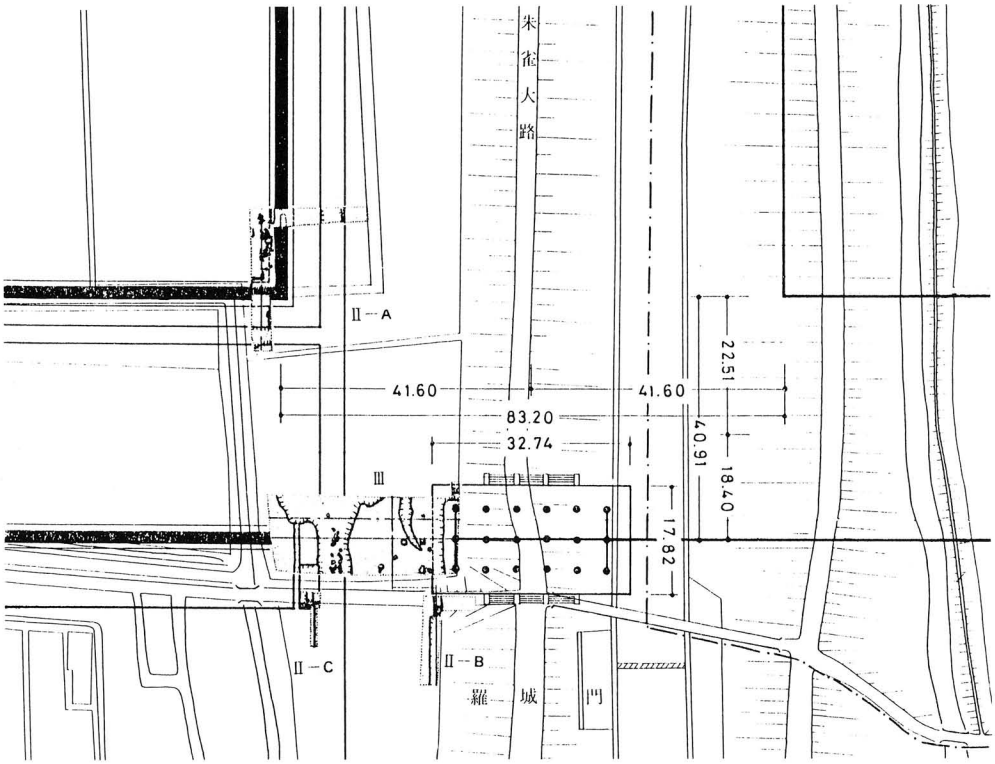

fig.20　羅城門付近条坊復原図

fig.21　羅城門北西部朱雀大路西側溝・築垣（西から）

fig.22　羅城門西方朱雀大路西側溝（南から）

南北方向の暗渠が２条ある。これは朱雀大路西側築地と九条大路北側築地の交叉する入隅部から九条大路北側溝への排水の役割をはたす。

羅城門　門の西辺と西北隅部の基壇を検出した。当初の基壇はかなり削平され土壇が高さ約60cm残るが、基壇化粧石や雨落溝は検出できなかった。掘込地業の深さは現状で23cmあり、版築が認められる。掘込地業の端から基壇残存裾までの長さは、西側で約１m、北側で90cmある。礎石の据付穴は調査区外である。基壇南辺よりやや南に段状遺構があり、その上面は残存基壇上面より約１m低い。門前の施設の一部と考える。

西側溝南延長部　羅城門基壇の掘込地業西端の西方14.5mにある。幅５m（復原幅４m）、深さ80cm。側溝東岸には護岸の石列がある。溝内の遺物には平安時代のものがあり、溝は平安時代まで生きていたと考える。

暗　渠　朱雀大路西側溝南延長部の西方3.1mの所に幅90cm、深さ40cmの南北溝がある。木樋暗渠の掘形と考える。

羅城と外濠　羅城門にとりつく羅城本体の遺構は存在を確認できなかったが、朱雀大路西側溝南延長部東岸の護岸石や暗渠掘形の存在から、東西方向の羅城の存在が推定できる。羅城が築地か土塁状のものかは不明。羅城の南側には黒色粘土・暗褐色粘質土の堆積する濠があるが、幅・深さは確認できなかった。

出土遺物　遺物は主に朱雀大路西側溝やその南延長部の堆積土から出土した。主なものについて記す。

土器・土製品は朱雀大路西側溝から主として出土。奈良時代後半の土師器30点（うち人面墨書土器１点）、須恵器５点、平安時代の瓦質土器４点、奈良時代中頃の土馬１点。

木製品は、ほぼ完形を保つ垂木１点が、朱雀大路西側築地内側で出土した。全長（263cm）・太さ（中央部断面6.4×8.0cm）から考えて築地に用いた垂木と考える。

瓦類は羅城門付近ではほとんど出土せず、大半は朱雀大路西側築地周辺と朱雀大路西側溝南延長部で出土した。軒瓦の量は少なく、軒丸瓦が10型式21点、軒平瓦が５型式９点ある。一部を除いて平城宮との同笵瓦であるが、宮内では少量しか出土しない型式（6316・6710・6711）が多い。

調査の成果　３次にわたる調査で、羅城門・羅城・朱雀大路・九条大路の配置を統一的にとらえることができた。

①　羅城門の規模については、掘込地業の東西幅が32.74mと推定された。まず九条大路西側築地心から延喜式が記載する平安京朱雀大路の築地心々距離（28丈＝83.2m）の２分の１をとり、朱雀大路中軸線を仮定した。次にこの中軸線から掘込地業の西端までの距離（16.37m）を測り２倍して掘込地業東西幅を得た。掘込地業の南北幅は不明。以上の成果をもとに平面形式を復原すると、桁行５間17尺等間、側柱からの基壇の出13尺となる。梁間は２間と推定される。立面は三手先の組物を持つ重層入母屋造り瓦葺きと復原できる。根拠は側柱からの基壇の出が13尺と考えられること、付近より瓦が出土することの２点で

ある。

② 朱雀大路の中軸線が国土調査法による第６座標系の方眼北に対してなす角度は、北で西に0°12′40″で、この値は平城宮内での造営方位（北で西に８分弱の振れ）よりさらに４′強振れが大きい。この値は羅城門位置での朱雀大路中軸と朱雀門中心とを結んだ軸線の国土座標系に対する振れとして算定した。

③ 九条大路の幅は、羅城門より西200mの位置では23mあり推定大路幅８丈に近い。この値は九条大路北側築地心より京南面外濠北岸までの距離として算定した。ただしこの場合、瑞地を伴う築地の余地がとれないので、羅城門にとりつく羅城は門の両脇100mくらいしかなく、このほかは京外から10丈ほどの外濠をへだてて直接大路であった可能性がある。九条大路の幅は羅城門周辺では南に広がり、41.4mある。これはほぼ14丈で朱雀大路幅の２分の１にあたる。

④ 羅城門の基壇残丘上面と朱雀門および大極殿基壇上面との比高は、朱雀門が13.6m、大極殿が21mである。

２．朱雀大路の調査　奈文研年報1974、平城京朱雀大路発掘調査報告（奈良市、1974）

1960・70年の平城京保存調査会の調査の結果、朱雀大路が今日の水田畦畔や水路などで地面上に鮮明に追跡でき、路幅が平安京朱雀大路の路幅（築地心々で28丈）に近いことが推測できた。しかし、地割によってわかる路幅がどこからどこまでの距離を示すのか、路面や側溝の状況はどうかなどの点は不明であった。本調査はこの点を明らかにすることを目とし、1974年に奈良市が実施し、奈良国立文化財研究所が協力した。

調査地は、奈良市柏木町カケコシ182・183・185～189、同市六条町183 ～185番地にわたる。朱雀大路と六条条間路の交叉点の北側で、羅城門と朱雀門のほぼ中間にあたる。調査の結果、朱雀大路路面と東西両側溝を検出し、その位置・規模を確認した。

朱雀大路　多少の削平を受けているが、ほぼ奈良時代の状況をとどめる。確認した路面敷の幅は67.3m。路面は中央部で高く、両端に向って低くなるかまぼこ形を呈し、現状で路肩は中央部より約50cm低い。路面には石・瓦敷等の痕跡はなく地道であった可能性が大きい。

朱雀大路東側溝と西側溝東側溝は幅約4.5m、深さ約1.1mある。素掘りで護岸施設はない。土層の堆積状況からみて水がよく流れていたと考える。西側溝は深さ約１mで、検出最大幅は7.5m。本来の幅は最低３回の変形修復のため不明。西側溝が六条条間路と接する位置で、西岸の下に玉石を数個発見した。朱雀大路と条間路の交叉点における施設と関係するものと考える。

溝に沿って存在したと考えられる築地は、その想定位置に検出できなかったが、東西両側溝の堆積土中に多量の瓦が落ちこんでいたことは、その存在の裏付けになる。

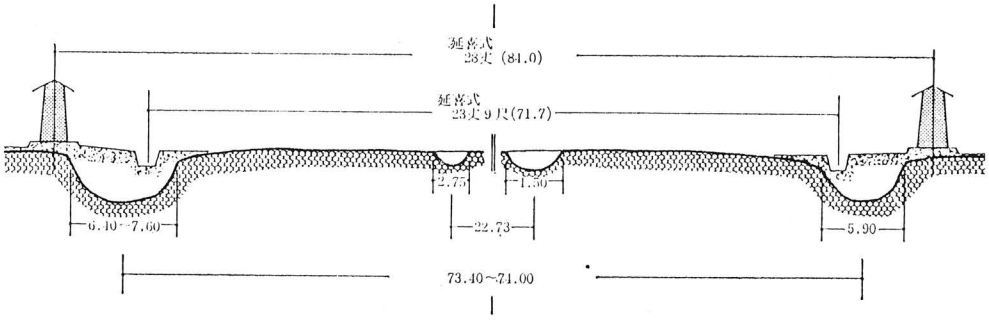

fig.23　朱雀大路横断面模式図

fig.24　昭和48年調査
朱雀大路東側溝
（東から）

fig.25　昭和48年調査
朱雀大路西側溝
（南から）

右京六条一坊二坪の宅地　左京側では、鉄滓・焼土を含む小土壙を検出し、鍛冶工房のあったことがわかる。柱穴がなく工房の規模は明らかでない。土壙が築地想定位置上にも存在するため、工房は奈良時代末以降のものと考える。

右京側では奈良時代の顕著な遺構はない。下層の溝状遺構から古墳時代のスキ・キネなどの木製品のほか、土師器・須恵器など多量の遺物が出土した。

下ツ道東・西側溝　朱雀大路路面の下層で検出。東側溝は幅約4.5m、深さ約40cm。西側溝は幅約4m、深さ約20～70cm。両側溝心心距離は約23mで、これは朱雀門北側で確認したものとほぼ一致する。両側溝の中心線は朱雀大路中心線と一致する。溝からは5C前半から7C末頃までの土師器片が出土した。

出土遺物　瓦類は朱雀大路両側溝から集中して出土した。量的には少なく、軒丸瓦が5型式7点、軒平瓦が2型式9点ある。宮内よりも京内で多く出土する型式（6316—6710）が多い点は羅城門周辺の調査成果と同じである。

土器類は、朱雀大路側溝からは少量しか出土せず、土師器・須恵器・緑釉陶器・模型カマド形土器がある。下ツ道側溝からは土師器・須恵器が出土した。右京六条一坊二坪で検出した古墳時代の溝から多量の土器が出土し、3層の堆積土のうち上層では土師器・須恵器、中・下層では土師器のみが出土した。中・下層のものは布留式の好資料である。

木製品は右京六条一坊二坪の古墳時代溝の中・下層から多く出土。原形を留めるものは下層に集中し、スキ3点、キネ・クワ形木製品・部材・えぐりのある木製品が各1点ある。そのほか朱雀大路東側溝東方の鍛冶工房跡から、萬年通宝・神功開宝・鋳型が出土。

調査の成果　朱雀大路の路面幅は67.3m、両側溝心々距離は73.4～74.0m。大路に面した築地の痕跡は確認できなかったが、羅城門の調査で検出した右京九条一坊の東を画す築地の位置・規模から考えて、築地心々距離は約90m（30丈）と推定でき、延喜式が記す平安京朱雀大路の築地間距離28丈よりも広くなる。

朱雀大路が国土調査法による第6座標系の方眼北に対してなす角度は、今回の調査による大路中心座標と朱雀門心を結ぶ線、および今回検出した朱雀

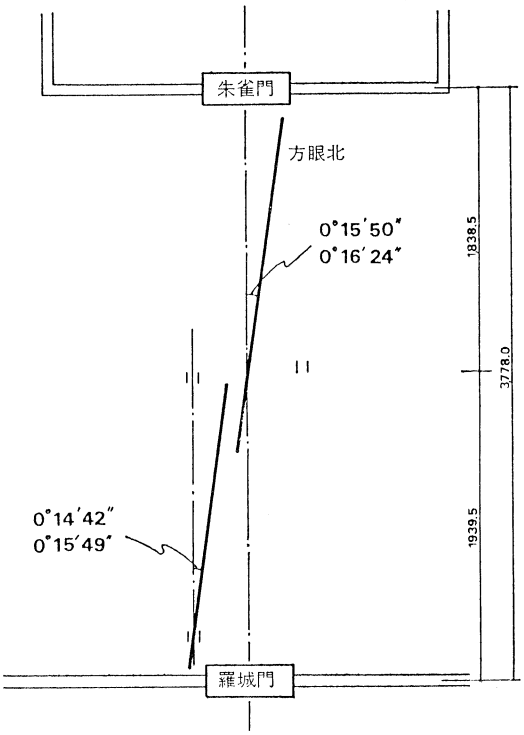

fig.26　朱雀大路中軸線方位概念図

大路西側溝心と右京九条一坊で検出した同西側溝心を結ぶ線が、それぞれ方眼北に対してなす角度を単純平均した数値、北で西へ0°15′41″と捉えられる。なお、この数値は以後の平城京内調査の際に基準方位として用いている。

3. 南面大垣の調査（第130・143次） 奈文研概報1981・1982

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部は、朱雀門両脇の南面大垣の復原整備に先立つ調査を、朱雀門東側（第130 次・1981年）、 同西側（第143 次、192年）の 2 回に分けて行った。大垣に関する資料の集積、遺構の遺存状況の把握と、朱雀門付近の条坊遺構の確認を目的とした。ここでは、調査成果のうち大路に関するものについて記す。

二条大路北側溝　素掘りの溝で、南面大垣中心との心々距離は12mある。朱雀大路を横断し、その部分だけ幅が狭い。規模は、朱雀大路東側溝以東では幅3.5 m、深さ20～40cm、朱雀大路西側溝以西では幅3.4m、深さ60cm、朱雀大路を横断する部分では幅1.6m、深さ30cmである。朱雀大路を横断する部分のみ埋土が他の部分と異なり、埋めもどしの時期が違うと考える。

朱雀大路側溝　東西両側溝ともに二条大路を横断し、二条大路北側溝にとりつく。東側溝は幅3.2m。深さ40cmある。西側溝は当初幅2.5m、深さ40cmの素掘り溝で、のちに東岸を杭と細杭のしがらみで護岸する。しがらみと岸の間には大量の瓦をつめこんで裏込めとする。

朱雀大路路幅　2回の調査で検出した朱雀大路両側溝の心々距離は73.80mで、この数値は柏木町・六条町での調査成果73.4～74.0mとほぼ等しい。

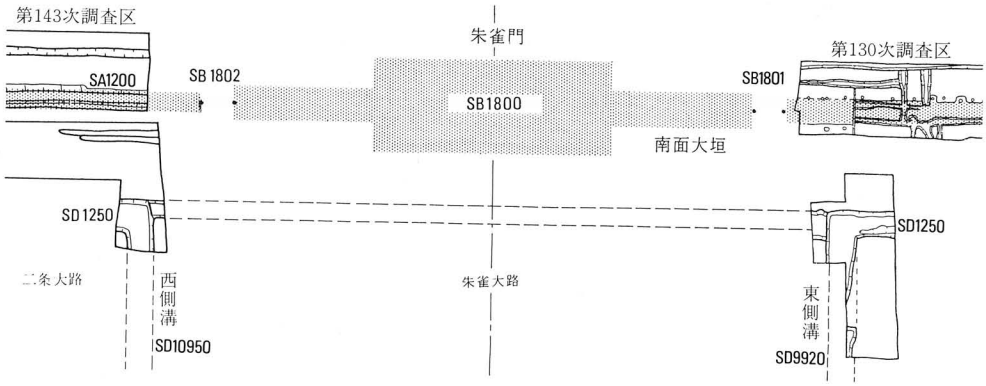

fig.27　平城宮第 130 ・ 143 次調査遺構図

fig.28　平城宮跡
第 130 次調査
（東から）

fig.29　平城宮跡
第 130 次調査
（北から）

fig.30　平城宮跡
第 143 次調査
（北から）